

連合マングローブ国際会議の報告

中須賀 常 雄

平成元年 12 月 1 日～5 日間、沖縄県宜野湾市の沖縄コンベンションセンターを主会場として連合マングローブ国際会議が開催された。本稿では本会議の経過及び概要について報告する。

1. はじめに

1987 年 9 月末から 10 月始めにかけてユネスコの MAB (人間と生物圏) 計画プロジェクトの一つとして琉球大学・文部省が主催して「サンゴ礁・マングローブの保全と管理」に関する東・東南アジア地域研究ワークショップ及び国際シンポジウムが琉球大学の運営担当で沖縄県で開催された。その際、全世界のマングローブの現状を憂慮し、マングローブに関する研究を推進し、マングローブの保全と管理の向上を図るために国際的な組織を設立する必要があることが提案され、全員一致で承認された。この会議に出席されていたユネスコのマングローブ・プロジェクトアドヴァイザーのヴァヌチー博士等は、この提案を受けて組織の設立について検討を続けられていたが、1988 年 5 月、タイ国で開催された同プロジェクト委員会に正式な議題としてその組織設立について提案をされた。その組織は、「国際マングローブ生態系協会」(International Society for Mangroves Ecosystems = ISME) という名称で、その設立について具体的な討議が行われ、会則の草案と同本部の日本への設置について承認された。ヴァヌチー博士は同年 6 月沖縄を訪れ、沖縄県と琉球大学に ISME 本部の沖縄への設置と、ユネスコプロジェクト会議の沖縄での開催について提案された。この提案を受けて琉球大学と沖縄県は、早速検討に入り、この機会にマングローブに関する国際シンポジウムを沖縄で開催する方向で関係者と協議し、各方面の御理解を得て、「連合マングローブ国際会議」を開催することとなった。

今回の会議は、各々主催者のある国際シンポジウム、セミナー及び公開シンポジウムなどを合同して開催するということで、「連合」と銘打って開催する運びとなった。そこで、大学、沖縄県及び総合研究機構など参加各機関相互の調整を図り、運営全体を担当する組織委員会を設置し、その下で実務を担当する運営委員会が琉球大学に設けられた。組織決定後、準備期間があまりなかったこともあって、サーキュラーの発送等急ぎ仕事で準備が進められ、関係者の方々に色々とお迷惑をおかけすることもあ

NAKASUGA, Tsuneo: Report on the International Conference on Mangroves
琉球大学農学部 (連合マングローブ国際会議事務局)

ったが、どうにか開催にこぎつけることができた。

参加者は、外国からはセネガル、サウジアラビア、ブラジル、ボリビア、アメリカ合衆国、ニュージーランド、オーストラリア、フィジー、バヌアツ、タイ、ヴェトナム、インドネシア、マレーシア、ホンコン、中国、インド、パキスタン、スリランカなど23か国の35機関から43名、国内からは、文部省、外務省、農林水産省、林野庁、環境庁、沖縄開発庁、国際協力事業団、京都大学及び東京農業大学他16大学、日本国際マングローブ協会、沖縄国際マングローブ協会及び一般参加者等143名、合計186名であった。

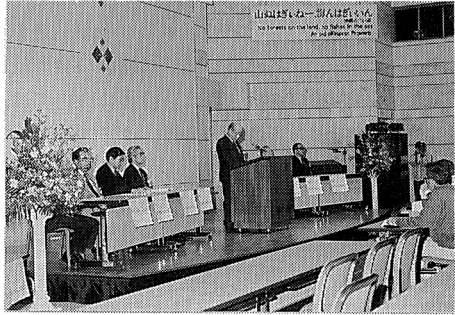


写真-1 国際会議の会場風景

2. 会議の概要

第1日目は、日本の研究者によるマングローブ研究発表があった。発表題目数は12題で、4セクションに分かれており、発表後、各々総合討論が行われた。発表内容は、セクション別に①植生、土壌及び地形、②植物生理及び動物、③生態、④利用及び種特性であった。日本語による発表にもかかわらず、多数の外国参加者の出席があり、活発に質疑討論が行われ、時間オーバーの連続であった。

研究発表終了後、日本マングローブ学会の設立総会が開かれ、設立準備会から会則及び役員案が提案された後、討議が行われ、全員一致で学会の設立が承認された。なお、学会事務所は東京農業大学内の海外農業教育・研究開発協会(SAEDA)内に置くことが決定された。

第2日目は、国際会議の開会式がユネスコのステイアルト博士、杉二郎本会議会長、山本順二文部省国際学術調整官、東江康治琉球大学長、西銘順治沖縄県知事、斎藤鎮男日本国際マングローブ協会会長、木崎甲子郎沖縄国際マングローブ協会会長、ユネスコのヴァヌチー博士及び各省庁代表者の出席の下に開催された。

開会式終了後、国際シンポジウム「マングローブ林の管理及び造林に関するシンポジウム」に移り、外国及び国内の研究者の英語による発表が行われた。この日は8題の研究発表が行われ、その内容は土壌、植生、造林、リモートセンシング及び現存量に関するものであった。

第3日目は、午前中はマングローブ地域調整委員会(Regional Mangrove Coordinating Committee = RMCC)が公開で開催された。先ず、沖縄国際マングローブ協会(Okinawa International Association for Mangroves = OKINAM)の木崎甲子郎会長及び日本国際マングローブ協会(Japan International Association

for Mangroves = JIAM) の斎藤鎮男会長が各々の協会の紹介及び活動状況について報告を行った。次いで、ユネスコのヴァヌーチ博士が国際マングローブ生態系協会について報告し、引き続いて、同協会の会則及び役員案についての討議に移り、会則については草案が採択された。役員については、会長にインドのスワミナサン博士、副会長には日本の斎藤鎮男会長、タイ国のサンガ博士及びユネスコのヴァヌーチ博士が承認された。また、同協会の事務所は沖縄県に置くことが承認された。

午後は、沖縄県、総合研究開発機構及び沖縄国際マングローブ協会主催で一般市民向けの公開シンポジウム「マングローブの保全と利用」が開催された。まず、西銘沖縄県知事及び西山喜一 SAEDA 副会長の歓迎挨拶があり、次いで、杉二郎本会議会長及びユネスコのヴァヌーチ博士のマングローブに関する基調報告があった。続いて、西平守孝琉球大学教授を座長としてパネルディスカッションに移り、パネリストは日本の荻野和彦愛媛大学教授、倉石晉広島大学教授、向後元彦「砂漠に緑を」代表、タイ国のサニット博士、オーストラリアのクラフ博士の5人でディスカッションが行われた。最後に、吉良竜夫琵琶湖研究所長が総括し、マングローブ生態系の重要性について一般の方々の理解を深めてもらった。

第4日目は、2日目に引き続いて、国際シンポジウムがあり、13題の研究発表が行われた。発表内容は、植物生理、環境、保全が中心であった。発表終了後、閉会式が行われ、連合マングローブ国際会議の幕を閉じた。

第5日目は、ポスト・エクスカーションで、沖縄本島北部のマングローブ林及び海洋博覧会記念公園の見学会が行われた。幸い天候にも恵まれ、外国及び県外からの参加者の方々には、沖縄のマングローブの現状を理解してもらい、また、暖かい沖縄の初冬の風物を楽しんでもらうことができた。

3. ま と め

今回の会議は準備期間が短かったことや資金の最終決定が遅れたことなどから、運営面には多少負担がかかったが、関係者の御援助と御協力とによって無事終える事ができた。また、会議に種々の内容が盛り込まれ「連合」というかたちで開催されたが、関係者以外の方々に対して、その主旨説明が旨くできず御理解を得るのに苦労させられた一面もあった。

会議の内容は、国内のマングローブ研究者による研究発表では幅広い分野からマングローブが研究されており、国内に多くのマングローブ研究者がいること、その研究者の多くが討論に参加できたことは大いに意義があった。

国際シンポジウムには東南アジアは勿論、アフリカ、アメリカ、オセアニア、インドなどほぼ世界中から研究者及び関係者の参加があり、一堂に会して討論を行ったことや、幅広い研究分野からの発表があったこと、特に社会科学的視点からの研究発表があったことなど国際交流及び研究の面で大きな意義があった。

公開シンポジウムでは、マングローブとは何かから始まり、それを受けてマングローブの保全と利用についてのパネルディスカッション、総括としてのマングローブ生

態系の重要性など、一般の方々のマングローブに関しての理解を深めた意義は大きいものがあった。

最後に、マングローブの研究や保全活動を支援する組織として、国内に沖縄国際マングローブ協会や日本国際マングローブ協会が設立されていたが、本会議で日本マングローブ学会の設立が承認されたこと、更に、国際マングローブ生態系協会の設立に向けての会則の草案が採択され、役員が決定し、その本部が沖縄に設置されることが承認されたことは、今後の活動に向けて大きな進歩であったものと評価できる。

以上のように、今回の会議は盛り沢山の内容であったが、各々がそれぞれの目的を果たす事ができた。これらの成果が今後のマングローブの研究や保全についての活動の推進に寄与することができれば望外の幸せである。

最後になったが、本会議の開催について惜しめない御援助と御協力を賜わった皆様に心より感謝の意を表する。

《お知らせ》

○第5回国際生態学会

本年8月23日(日)～30日(金)、横浜国立大学で標記の国際会議が開催されます。すでにご承知の方も多いと思いますが、念のため熱帯林に関係した課題をご紹介します。〔特別講演〕東アジアおよび東南アジアの森林生態系：グローバルな展望（吉良竜夫）；熱帯地域の生態（FURTADO, J.I.D.R.）。〔シンポジウム〕降雨林の動的特性と維持機構；熱帯無脊椎動物の生活史特性；湿潤熱帯における資源利用に関する社会生態的相互作用；アマゾンの森林破壊：影響と別の選択；天然資源の保続的管理のための熱帯立地の保全；東南アジアのタウンヤ農業：生態的・経済的視点；東南アジアにおけるマングローブ林管理とその生態的研究；グローバルな視点にたった東アジア・東南アジアの森林生態系：概観と常緑広葉樹林；同：落葉広葉樹林；東南アジアにおける熱帯・亜熱帯生態系など。参加費：35,000円（学生）25,000円；問合わせ先：〒240 横浜市保土ヶ谷区常盤台156 横浜国立大学環境科学研究センター内、第5回国際生態学会議事務局（電）045-335-1451（内）2381